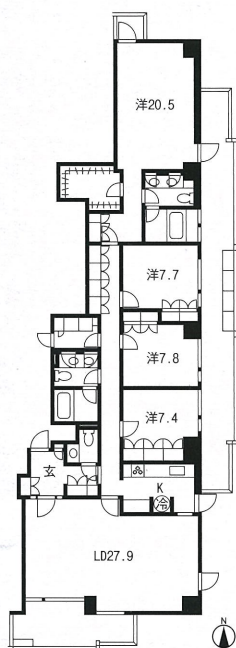


今月のテーマ



住戸面積は188㎡の広さ。バルコニーの間口が広いワイドスパン仕様で各居室の採光もよく取れる



建築家

Someya Masahiro

染谷正弘 / DSA住環境研究室代表。日本大学大学院理工学研究科非常勤講師。マンションや戸建てなどの設計を多数手がける。住民同士の交流も含めたコミュニティデザインの考え方を提唱し、住まいづくりや街づくりに参画する(写真撮影/筆者)

住 宅は、暮らしの器である。その骨格となるのが間取りで、そこには家族のかたちや住み手のライフスタイルが的確に反映される。だから、時代や国によって住宅の間取りは随分と変わる。

いま私たちが日々普通に暮らしている住宅を「近代住宅」という。それは、近代社会の主役となった通勤サラリーマン核家族のための専用住宅で、日本の住まいの主流となるのは戦後のこと。その間取りは「nLDK」(n: 寝室数)と明快に表記され、家族それぞれのプライバシーがきちんと守られるところにその特徴がある。

先日、その近代住宅の理想の間取りにめぐりあった。六本木ヒルズのさくら坂にある外国人向けの賃貸マンション「六本木さくら坂レジデンス」である。

まず、この間取りを見てほしい。驚かされるのは、その廊下の長さである。約12mの廊下の両端には、約28畳の居間・食堂と20畳の主寝室がある。そして、南北軸に長い住戸は、南側にパブリック・ゾーン、北側にプライベートゾーンと明快に分離されて、寝室群は全室東向き。諸室すべてが明快な用途をもち、曖昧な空間はどこにもない。最良の居住環境をめざした完璧な間取りといっていいい。

この間取りをさらに読み解いてみよう。南向きにある横長の居間・食堂は、西側半分に居間と東側半分に食堂とコーナー化されている。居間側には掃き出し窓がついた奥行き深いバルコニーがあり、食堂側の開口部は腰窓で、その奥にはクローズ型の台所がある。そして、玄関ホールからまず居間側に入って奥の食堂側へと向かう動線だ。これほどに正しい居間・食堂の平面構成を、僕は見たことがない。

玄関ホールには来客用のトイレがあり、その横にプライベートゾーンの廊下へとつながるドアがある。それは、台所の勝手口とも直結している。だから、生活動線上で不自然に錯綜することはない。その長い廊下の東側には7.5畳前後の子ども室が3室並び、その向かいにはサニタリー(洗面、風呂、便所)とユーティリティ(洗濯機2台)が水まわりとして集約され、壁面収納もたっぷりとなる。実に機能的で合理的だ。

夫婦専用のサニタリーと大きなウォークイン・クローゼットを内蔵した主寝室は最北端にあるから、落ち着いた雰囲気に満ちている。その東面には、子ども室からつながる全長約20mのサービスバルコニーがあり、それは空調室外機置き場や避難経路にはもちろん居室の延長空間としても様々に利用できそうだ。それに、日本の伝統家屋の「縁側」のように居室の内外を心地よくつないでいる。

「六本木さくら坂レジデンス」には、外国人でも、日本人でも、近代社会に慣れ親しんだ家族なら、おそらく何の不満もなく快適に暮らせるに違いない。それは、この住宅が、近代住宅の理想の間取りをもつからである。近代住宅を、インターナショナルでグローバルスタンダードな居住空間ということもできよう。住まいの近代化とは特に日本では住まいの西欧化であり、インターナショナル化でもあったということだ。

日本の住まいの本格的な近代化は、1950年代に「nDK」と表示された公団アパートの間取りからスタートする。そこに、近代住宅の萌芽を見ることはできるが、部屋は畳敷きで間仕切りは襖という日本の伝統家屋特性を色濃く残していた。その襖や畳や柱を払拭し、諸室を「壁」で間仕切り、その用途を明確化することが日本の住まいの近代化だった。それは、日本文化の《柱と襖》の居住空間を、西欧文化の《壁とドア》の居住空間へと移行させていく過程でもあった。

住宅内を公(Public)と私(Private)に明快に「壁」で間仕切る「PP分離」という考え方が1980年ごろに登場する。同時に「nDK」に居間の「L」が追加されて「nLDK」という表記がその間取りと共に主流になり、日本の住まいの近代化はようやく完了する。

「心の壁」というたとえがある。建築の壁は、知らぬ間に人と人との間に「心の壁」をつくってしまうこともあるようだ。人の気配やぬくもりを感じ合える日本の《柱と襖》の居住空間が実は、いま再び見直されつつある。日本の住宅の間取りは、いまも刻々と変化している。「nLDK」という呼び名も、いつか消えていくだろう。

「理想の居住空間」を読み解く。



リビング・ダイニングの内装は外国人向けのマンションといえど日本のタイプと変わらないナチュラルなカラートーン



奥が「六本木さくら坂レジデンス」。物件隣には、韓国人アーティスト・チェ・ジョンファ氏が遊具デザインを手がけたロボロボ園がある